

# 育児における初期経験に関する考え方

— 妊婦と学生の比較 —

池 山 和 子

(2003年10月21日 受理)

## Early Experiences and in Raising a Child

— Comparing Expectant Mothers and Students —

IKEYAMA Kazuko

### Abstract

The purpose of this report is to investigate the different views of early experiences and in raising children between expectant mothers and students. In 2001, questionnaires on early experiences and child care were sent out to expectant mothers, and in 2003, sent out to students in the Department of Home Economics, Faculty of Education, too. Questionnaire sheets were collected from 162 expectant mothers, and from 50 students (two male).

The results were as follows:

1. On the whole, the expectant mothers and students showed similar answers in the affirmative, except answers to the questions : "Do you think it is good to cradle a baby whenever a baby cries to be held?" and "Do you think it is good to nurse a baby whenever a baby ask for milk instead of feeding regularly?" The students' answers in the negative to these two questions differed from the expectant mothers.
2. The subjects of this report formed two groups by the quantification theory type III and Cluster analysis. Group *a* showed a different tendency whereby they showed gratitude towards their ancestors. Group *b* showed gratitude toward things which exist now. These two groups' views of early experiences and in child care are not so different on the whole.

キーワード：初期経験，育児，妊婦，学生

## 1 はじめに

乳幼児期に周囲の人々、特に中心的な存在である母親とどのような人間関係をもつか、すなわち初期経験がその後の成長・発達に長く及ぼしうる影響についてはかなり明らかにされつつある<sup>1)</sup>。しかしながら、実際の子育て場面においては初期経験の重要性は認識されながら、具体的な行動においてはまだ迷いも大きく、その点から育児不安へとつながる場合も多いように思われる。

妊娠中の女性にとって胎内の子どもの健全な成長と出産、誕生後のより健やかな成育は現実の重大な関心事であり、行政や個々の産院などの用意する系統だった指導を受ける他にも、毎日の生活の中で子育てに関する情報へ自然に関心を向け、マスメディアやミニコミなどによっても流されてくる情報についてもいつの間にか取り入れる構えを持っていると考えられる。

他方、学校教育における家庭科保育領域に対する生徒の学習意欲は、今ひとつであると聞くこともある。特に最近では身近に乳幼児の姿も少なく、子どもと直接関わる機会のほとんどない大半の中学校や高校生にとって現実味や実感がなく、学習する内容が役に立つのは先のことと考えがちなのがその理由の一つとして挙げられることもある。しかし現実感に乏しいということは保育領域の問題だけではなくそれだけが本質的な理由とは考えにくい。旧学習指導要領までの家庭科の指導計画においての保育領域は実習が取り入れにくく、他の領域に比べ座学的な学習に終わりがちなことも生徒の学習意欲が高まりにくいと感じられる一つの理由であったとも考えられる<sup>2-3)</sup>。

平成13年度の修士論文において先間は、妊娠中の産院に通っている女性を対象に、育児に関わる初期経験についての知識を尋ね、妊婦が基本的な知識を一定程度持っていることを報告した<sup>4)</sup>。ただしこの産院は、特に母性教育に熱心と言われている産院であり、調査の結果についてはその影響も大きかったと考えられることも指摘している。本報告は、先間の報告とは異なる産院に通う妊婦および子育てに関して中学・高校生よりも子育て年齢により近いとは言え現実感はまだ少ないと考えられる学生を対象に調査を行い、興味・関心の強さが異なると考えられる立場の違いが初期経験を中心とした育児の考え方にどのように反映するかを調べようとしたものである。

## 2 方 法

妊娠中の女性については、平成13年度に調査を行った。この調査を基に、学生を対象とする質問紙調査を行なった。

(1) 対象：妊婦；M産院へ通っている者。産院を通じて質問紙の配布、回収を行なった。

学生；鹿児島大学教育学部家政専修に在学中の学生。各学年の学生一人にその学年全体の質問紙の配布と回収を依頼した。平成13年度公布の指導要領による学生と旧の

指導要領にもとづく家庭科教育を受けている者とが移行措置期間もふくめ、混じっていると考えられる。

- (2) 期間：妊婦；平成13年8月，学生；平成15年6月。
- (3) 質問紙の内容：①子どもの初期経験と育ちに関する具体的な内容を15項目挙げ「そう思う」「そうかもしれない」「そうは思わない」の3択で回答を求めた\*1。②情操に関わる質問3項目について「はい」「いいえ」の2択による回答を求めた，③その他，質問紙への評価，「上に子どもがいるか（妊婦）」などの質問。

## 結果と考察

### (1) 対象者の属性

対象者の属性を表1に示す。妊婦は全体で162名，このうち上の子どもがいると回答した者122名，いない者35名，不明5名で，今回は二人目以降の出産となる者が75.3%であった。妊婦の回収率については，産院で通ってくる妊婦に適宜協力を依頼，回収しており不明である。学生については4年生の回収率が低く37.5%であったが，全体の回収率は82.0%であった。この中に男子学生が2名含まれており48名は女子学生である。

表1 調査対象者

対象者の別	人数	%
妊婦	小計 162	76.4 100%
上の子	いる	122 75.3
	いない	35 21.6
	不明	5 3.1
学生	小計 50	23.6 100%
学年	1年	15 30
	2年	15 30
	3年	13 26
	4年	6 12
	不明	1 2
計	212	100.0

回答結果について，群の傾向をクロス集計と $\chi^2$ 検定によっておこなった。検定に当っては，全体に「そうは思わない」の選択が低く，クロス表のセルの数値が4以下になる場合が多いため「そうは思わない」と「そうかもしれない」を合わせ「そうとは言えない」とし，「そう思う」の選択との間でクロス集計したものを示す。表においては質問紙で用いた3択での値を示す。

### (2) 妊婦と学生の傾向

妊娠中の女性と学生それぞれの，子どもの初期経験に関する回答結果を表2に示す。16項目中10項目では肯定「そう思う」の回答が60%前後以上である。15項目中，「そうは思わない」は妊婦においては，最も高い項目で13.8%であり，その他の項目では0から7.4%と低い。妊婦と学生とも12項目では「そう思う」が最も高く「そうかもしれない」が次であり，「思わない」が低い点で，比較的似た傾向を示している。うち「母親と家族が明るい気持で生活していると，母体内の子どもも明るい気持で過ごしている」「誕生を喜びをもって迎えられることで，子どもは安心して安定した気持で一生を踏み出す」の2項目では有意差がみられたが，妊婦のほうがより確信をもった「そう思う」の回答が多く，学生では「そうかもしれない」の回答にずれている。これは質問内容から妊婦では生活の中での実感による回答と考えられる。

表2 妊婦と学生別子どもの初期経験に関する感じ方

		単位:%			N.A.	p
母体内で、子どもは母親の心拍や周囲の人々の優しいことばを聞いて安らぎを感じている						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	82.1	88.0	82.1	17.9	0.0	100.0
かもしれない				12.0	0.0	100.0
思わない				0.0	0.0	100.0
母親と家族が明るい気持で生活していると、母体内の子どもも明るい気持で過ごしている						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	90.7	80.0	90.7	9.3	0.0	100.0
かもしれない				20.0	0.0	100.0
思わない				0.0	0.0	100.0
誕生時、喜びを持って迎えられることで、子どもは安心や安定した気持で一生活を踏み出す						
	妊婦(n=160)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	88.1	78.0	88.1	11.9	0.0	100.0
かもしれない				22.0	2.0	100.0
思わない				0.0	0.0	100.0
母体内、誕生後を通じて、周囲から愛され、周囲を信頼して過ごせることが成長発達の大切な土台である						
	妊婦(n=160)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	86.3	87.8	86.3	13.1	0.6	100.0
かもしれない				12.2	0.0	100.0
思わない				0.6	0.0	100.0
子どもの気持をよくわかって大切に母の存在が子どものその後の人間関係を豊かに前向きな人生を広げていく						
	妊婦(n=159)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	80.5	74.0	80.5	18.9	0.6	100.0
かもしれない				24.0	2.0	100.0
思わない				0.6	0.0	100.0
乳児期に母親を始めとする周囲の人との信頼関係が深いほど困難にあきらめず前向きに切り開いていく力が身に付く						
	妊婦(n=161)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	52.8	36.0	52.8	42.9	4.3	100.0
かもしれない				46.0	18.0	100.0
思わない				4.3	0.0	100.0
乳児が抱いてほしがったら何時でも抱いてあげれば良く、抱き癖がついても全く問題ない						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	49.4	18.0	49.4	43.2	7.4	100.0
かもしれない				48.0	34.0	100.0
思わない				7.4	0.0	100.0
乳児が欲しがったときに、哺乳、授乳するのが望ましく時間を決めて与えなければならぬ必要は全くない						
	妊婦(n=160)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	38.1	14.0	38.1	48.1	13.8	100.0
かもしれない				50.0	36.0	100.0
思わない				13.8	0.0	100.0
社会問題となるような青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が充分築けていない場合が多い						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	50.0	28.0	50.0	42.0	8.0	100.0
かもしれない				60.0	12.0	100.0
思わない				8.0	0.0	100.0
散らかしたりするような親にとって不都合な遊びも、子どもの立場では探索学習である						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	74.1	74.0	74.1	25.3	0.6	100.0
かもしれない				26.0	0.0	100.0
思わない				0.6	0.0	100.0
基本的な生活習慣も始めはうまくできないが、大人は手を出さず自分で上手になるのを見守るのが良い						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	72.2	82.0	72.2	25.3	2.5	100.0
かもしれない				18.0	0.0	100.0
思わない				2.5	0.0	100.0
子どもの気持を押さえつける叱り方をすると、大人の顔色をうかがうようになり主体性が育たない						
	妊婦(n=161)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	69.6	68.0	69.6	29.2	1.2	100.0
かもしれない				30.0	2.0	100.0
思わない				1.2	0.0	100.0
子どもは母親の注意を自分に引きつけようとしてまとわりついたり、していることの邪魔をすることがある						
	妊婦(n=161)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	67.1	70.0	67.1	32.9	0.0	100.0
かもしれない				30.0	0.0	100.0
思わない				0.0	0.0	100.0
子どもは言葉で表現するのに時間がかかることがあるがよく聞いてわかってあげることによって信頼が育つ						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	82.1	84.0	82.1	17.9	0.0	100.0
かもしれない				14.0	2.0	100.0
思わない				0.0	0.0	100.0
幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると、子どもの心は傷ついていることがある						
	妊婦(n=162)	学生(n=50)	計	N.A.	p	
そう思う	43.8	42.0	43.8	52.5	3.7	100.0
かもしれない				50.0	8.0	100.0
思わない				3.7	0.0	100.0

注) 検定に当たっては「思わない」「そうかもしれない」を合わせ「そうは言えない」とし、2×2のクロス表によって行った。 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

妊婦と学生で回答の傾向が特に大きく異なっていた項目は、「乳児が抱いてほしがったらいつでも抱いてあげればよく、抱き癖を問題とする必要はない」「乳児が欲しがったときに、哺乳・授乳すればよく、時間を決めて与えなければならない必要はない」の2項目で、学生では、「そう思わない」の回答が、「乳児が抱いてほしがったらいつでも抱いてあげればよく、抱き癖を問題とする必要はない」34.0%「乳児が欲しがったときに、哺乳・授乳すればよく、時間を決めて与えなければならない必要はない」36.0%であり、「そう思う」の回答よりも高く、この項目に対しては否定的な考え方をしている。一方妊婦では「そう思わない」と回答した者は10%前後で、「そう思う」の回答の方がより高く、どちらかと言えばこの項目に対し肯定的である。

他に有意な差のみられた項目について「そう思わない」を選択した学生の割合をみると、「乳児期に母親を始めとする周囲の人との信頼関係が深いほど困難にあきらめず前向きに切り開いていく力が身につく」18.0%、「青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が築けていない場合が多い」12.0%が次ぎ、その他11項目ではいずれも10%以下である。この2項目は乳幼児期の経験が、その後の年長期に及ぶ可能性を含む内容であるが、妊婦、学生とも「そう思わない」の回答は低い、「そう思う」が妊婦で52.8%と50.0%、学生で36.0%と28.0%と、両群とも肯定には確信がもてない様子がうかがえる。

妊婦と学生間で、16項目中5項目に有意差がみられ、この差は関心と現実感による差を反映していると考えられるが、現実の重大事として子育てを目の前に控えている妊婦と、一般的な知識として学んでいる学生の立場の違いの大きさほどには全体としての回答の傾向の差は大きくないように感じられる。差のはっきりしている2項目を除くと、学生では確信は低いものの全体的に妊婦と比較的類似した考え方をしていると考えられる。

情操に関わると考えられる項目については、3項目とも有意に差がみられ、いずれも妊娠中の女性の方が「はい」の回答が高い(表3)。

### (3) 情操に関わると考えられる項目によるグループ化

本調査では、初期経験に関する考え方を問う質問の他に、個人の存在を支えるものについての意識の方向を尋ねる質問を設けている。意識の持ち方として、情操の一側面である感謝の気持ちを、自分の存在を支えるものへ持つことがあるかどうかを尋ねた。これら情操に関わる3項目への回答を説明変数として数量化Ⅲ類による解析を行ない、それぞれのサンプルスコアからクラス

表3 妊婦と学生による情操に関わる意識

		単位:%		
命を支えている食物、水、空気等への感謝の心をよく感ずる		はい	いいえ	N.A. p
妊婦(n=161)		86.3	13.7	100 1 ***
学生(n=50)		60.0	40.0	100
人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある		はい	いいえ	N.A. p
妊婦(n=159)		91.2	8.8	100 3 *
学生(n=50)		78.0	22.0	100
多くの人の営みの歴史的な積み重ねが今の生活へ至ることへよく感謝の心を感じる		はい	いいえ	N.A. p
妊婦(n=157)		89.8	10.2	100 5 **
学生(n=50)		74.0	26.0	100

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

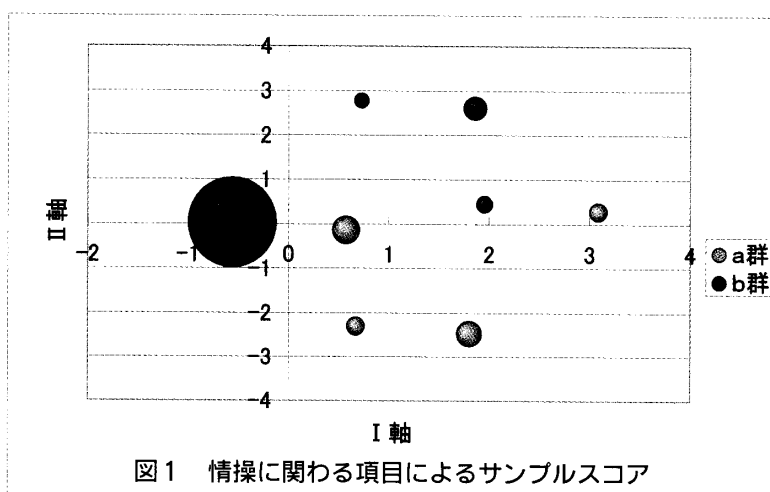
ター分析 (k - mean 法) によって対象者のグループ化を行なった。表4は、情操に関わる3項目への回答による数量化Ⅲ類による各軸の固有値・寄与率・相関係数値を、表5は各軸のカテゴリースコアを示す。表5から、第Ⅰ軸は、現在の人を取り巻く環境について広がりをもった環境と、人が直接取りいれ現在その人の生活を支えている環境の、環境の個人との近さと遠さの軸を示し、第Ⅱ軸は、現在の人を取り巻く環境と現在に至る時間軸的な支えの軸を、第Ⅲ軸は肯定と否定の軸を、それぞれ示していると解釈することができる。a群に属する者は38名、b群に属する者は168名となった。図1、2は、両群の各軸上の位置を示したものである。各円の面積は人数を示している。

表4 情操に関わる項目の回答を変数とした数量化Ⅲ類による軸の固有値等

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第Ⅰ軸	0.5874	58.74%	58.74%	0.7664
第Ⅱ軸	0.2270	22.70%	81.43%	0.4764
第Ⅲ軸	0.1857	18.57%	100.00%	0.4309

表5 情操に関わる項目の数量化Ⅲ類による第Ⅰ～Ⅲ軸のカテゴリースコア

第Ⅰ軸	第Ⅱ軸	第Ⅲ軸			
人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある—はい	2.5997	人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある—はい	3.4528	昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じることがある—はい	2.0541
昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じることがある—はい	2.4264	昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じることがある—いいえ	0.4693	人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある—はい	1.7435
命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じることがある—いいえ	2.0743	命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じることがある—はい	0.0488	命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じることがある—はい	0.6955
人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある—いいえ	-0.3591	命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じることがある—いいえ	-0.1905	人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある—いいえ	-0.2408
昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じることがある—いいえ	-0.3976	人間を超えた自然に接し感謝の心を感じることがある—いいえ	-0.4769	昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じることがある—いいえ	-0.3366
命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じることがある—はい	-0.5312	昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じることがある—はい	-2.8642	命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じることがある—いいえ	-2.7158



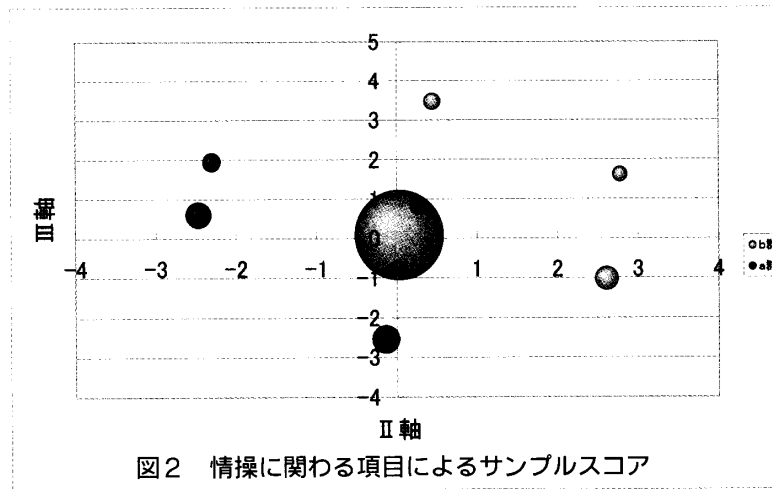


図1と2から、この2群の差は、a群では昔からの積み重ねという時間軸的な方向に意識が向っている傾向があり、b群では現在の環境的な広がりの方に意識が向う傾向があり、そこに差があると考えられる。この2グループの情操に関わる3項目の質問へのそれぞれの回答の仕方のパターンとその人数を示したのが表6である。それぞれの群における妊婦と学生の内訳は表7の通りであった。妊婦ではb群が多いのに対し、学生ではa群の割合が高く、この差は有意である。

表6 群別情報に関わる項目の回答パターン

	昔の人々の生活の積み重ねへ感謝の心を感じる	命を支える食物、水、空気等へ感謝の心を感じる	人間を超えた自然に接し感謝の心を感じる	人数
a群	はい	いいえ	はい	6
	はい	いいえ	いいえ	12
	はい	はい	いいえ	6
	いいえ	いいえ	いいえ	14
小計				38
b群	はい	はい	はい	5
	いいえ	いいえ	はい	10
	いいえ	はい	はい	4
	いいえ	はい	いいえ	149
小計				168
計				206
N.A.				6

(4) 個人を支えるものへの情操と関わる意識の向け方による初期経験についての考え方

前項でグループ化した2群について、育児に関する初期経験についての各項目への回答の傾向を調べたものが表8

表7 妊婦・学生別による情操に関わる意識群構成

	単位:%		計
	a群(n=38)	b群(n=168)	
妊婦(n=156)	13.5	86.5	100.0
学生(n=50)	34.0	66.0	100.0
計(n=206)	18.4	81.6	100.0
df=1 $\chi^2=10.6171$ p<0.01			

である。15項目中有意差の得られたのは、「青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が築けていない場合が多い」「散らかしたりする親にとって不都合な遊びも子どもの立場では探索学習である」「幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると、子どもの心は傷ついていることがある」の3項目であった。有意差のあった3項目とも、b群のほうが「そう思う」の割合が高く、a

表8 情操に関わる意識群別育児と初期経験に関する考え方

		単位:%					
母体内で、子どもは母親の心拍や周囲の人々の優しいことばを聞いて安らぎを感じている		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		78.9	21.1	0.0	100.0		
b群(n=168)		83.9	16.1	0.0	100.0		
母親と家族が明るい気持で生活していると、母体内の子どもも明るい気持で過ごしている		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		84.2	15.8	0.0	100.0		
b群(n=168)		88.7	11.3	0.0	100.0		
誕生時、喜びを持って迎えられることで、子どもは安心や安定した気持で一生活を踏み出す		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		89.5	10.5	0.0	100.0		
b群(n=166)		84.3	15.1	0.6	100.0		2
母体内、誕生後を通じて、周囲から愛され、周囲を信頼して過ごせることが成長発達の大切な土台である		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		81.6	18.4	0.0	100.0		
b群(n=165)		87.9	11.5	0.6	100.0		3
子どもの気持をよくわかって大切に母親の存在が子どものその後の人間関係を豊かに前向きな人生を広げていく		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		68.4	28.9	2.6	100.0		
b群(n=165)		81.2	18.2	0.6	100.0		3
乳児期に母親を始めとする周囲の人との信頼関係が深いほど困難にあきらめず前向きに切り開いていく力が身に付く		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		34.2	55.3	10.5	100.0		
b群(n=167)		51.5	41.3	7.2	100.0		1
乳児が抱いてほしがったら何時でも抱いてあげれば良く、抱き癖がついても全く問題ない		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		36.8	42.1	21.1	100.0		
b群(n=168)		42.3	45.8	11.9	100.0		
乳児が欲しがったときに、哺乳、授乳するのが望ましく時間を決めて与えなければならない必要は全くない		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		23.7	44.7	31.6	100.0		
b群(n=167)		34.7	49.1	16.2	100.0		1
社会問題となるような青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が充分築けていない場合が多い		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		23.7	65.8	10.5	100.0		*
b群(n=168)		48.8	42.3	8.9	100.0		
散らかしたりするような親にとって不都合な遊びも、子どもの立場では探索学習である		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		60.5	39.5	0.0	100.0		*
b群(n=168)		76.2	23.2	0.6	100.0		
基本的な生活習慣も始めはうまくできないが、大人は手をささず自分で上手になるのを見守るのが良い		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		71.1	26.3	2.6	100.0		
b群(n=168)		75.0	23.2	1.8	100.0		
子どもの気持を押さえつける叱り方をすると、大人の顔色をうかがうようになり主体性が育たない		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		60.5	36.8	2.6	100.0		
b群(n=167)		70.1	28.7	1.2	100.0		1
子どもは母親の注意を自分に引きつけようとしてまとわりついたり、していることの邪魔をすることがある		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		65.8	34.2	0.0	100.0		
b群(n=167)		68.3	31.4	0.0	100.0		1
子どもは言葉で表現するのに時間がかかることがあるがよく聞いてわかってあげること信頼が育つ		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		76.3	21.1	2.6	100.0		
b群(n=168)		83.8	16.7	0.0	100.0		
幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると、子どもの心は傷ついていることがある		そう思う	かもしれない	思わない	計	N.A.	p
a群(n=38)		21.1	65.8	13.2	100.0		**
b群(n=168)		47.6	49.4	3.0	100.0		

注) 検定に当たっては「思わない」「そうかもしれない」を合わせ「そうは言えない」とし、2×2のクロス表によって行った。 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001



群では「そうかもしれない」の回答が高くなっている。このうち「青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が築けていない場合が多い」については、学生と妊婦の間の差と個人を支えるものへの情操の意識の向きの傾向の異なる2群（以降は、「情操に関わる意識傾向群」とする）の間の差として共通している。近年多発している社会的に衝撃を与えた少年事件については、それぞれの事例について生育暦を深く綿密に調査した一般的な読者を対象とした書物も数多く出版されており、関心の強い者の目には止まりやすく読む機会もあると考えられる<sup>5-7)</sup>。「そう思う」の回答はそのような書物によりふれていることも含んでいるとすれば、妊婦の方が関心の高いことを反映しているとも考えられる。両群で有意差のみられたものは他に「散らかしたりするような親にとっては不都合な遊びも、子どもの立場では探索学習である」「幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると子どもの心は傷ついていることがある」の2項目であるが、これらは子どもの立場に立った考え方であり、時間軸的な方向よりも現在の直接的に体験される環境軸的な方向へ意識を向ける傾向のある群の方が肯定の回答が高くなっている。

さらにこの情操に関わる意識の傾向の影響を除いて、妊婦と学生の差をみるために、a群とb群それぞれ別に、育児に関する初期経験についての各項目回答について妊婦と学生とでクロス集計を行った。両群に共通して妊婦と学生で有意差のみられた項目は、「乳児が抱いてほしがったらいつでも抱いてあげればよく、抱き癖を問題とする必要はない」であり（表9）、この項目に関する考え方は、妊婦と学生という立場で異なると考えてよいと思われる。また、妊婦と学生それぞれで、各項目と情操に関わる意識傾向群とのクロス集計と検定を行ったところ、有意ではなかったが、「幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると子どもの心は傷ついていることがある」については、差がみられ、意識の方向の傾向がいくらか影響しているところもあると感じられた。

#### (5) 育児における初期経験に関する考え方

子育てに関する考え方や特に実際の感覚に大きく影響する要因として、他に、今回は調査していないが当人の育てられ方が考えられる<sup>8)</sup>。妊婦と学生とで特に考え方の傾向の異なっていた「乳児が抱いてほしがったらいつでも抱いてあげればよく、抱き癖を問題とする必要はない」「乳児が欲しがったときに、哺乳・授乳すればよく、時間を決めて与えなければならない必要はない」の2項

表9 a群・b群とも、妊婦・学生間で有意差のあった項目

		単位: %			
		乳児が抱いてほしがったら何時でも抱いてあげればよく、抱き癖がついても全く問題ない			
		そう思う	かもしれない	思わない	計 p
a群	妊婦 (n=21)	57.1	33.3	9.5	100.0 *
	学生 (n=17)	11.8	52.9	35.3	100.0
b群	妊婦 (n=135)	47.4	45.9	6.7	100.0 **
	学生 (n=33)	21.2	45.5	33.3	100.0

注) 検定に当たっては「思わない」「そうかもしれない」を合わせ「そうは言えない」とし、2×2のクロス表によって行った。 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表10 M産院の「よく知っている」とN産院の「そう思う」の選択割合

初期経験に関する項目	産院:		単位:人(%)
	N産院	M産院(今回)	
	よく知っている	そう思う	
母体内で、子どもは母親の心拍や周囲の人々の優しいことばを聞いて安らぎを感じている	402 (80.2)	133 (82.1)	
母親と家族が明るい気持で生活していると、母体内の子どもも明るい気持で過ごしている	439 (87.3)	147 (90.7)	
誕生時、喜びを持って迎えられることで、子どもは安心や安定した気持で一生を踏み出す	348 (69.6)	141 (88.1)	
母体内、誕生後を通じて、周囲から愛され、周囲を信頼して過ごせることが成長発達の大変な土台である	403 (80.1)	138 (86.3)	
子どもの気持をよくわかって大切に母親の存在が子どもその後の人間関係を豊かに前向きな人生を広げていく	369 (73.9)	128 (80.5)	
乳児期に母親を始めとする周囲の人と信頼関係が深いほど困難にあきらめず前向きに切り開いていく力が身につく	248 (49.4)	85 (52.8)	
乳児が抱いてほしがったら何時でも抱いてあげれば良く、抱き癖がついても全く問題ない	271 (54.0)	80 (49.4)	
乳児が欲しがったときに、哺乳、授乳するのが望ましく時間を決めて与えなければならない必要は全くない	172 (34.2)	61 (38.1)	
社会問題となるような青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が充分築けていない場合が多い	258 (51.4)	81 (50.0)	
散らかしたりするような親にとって不都合な遊びも、子どもの立場では探索学習である	307 (64.2)	120 (74.1)	
基本的な生活習慣も始めはうまくできないが、大人は手を出さず自分で上手になるのを見守るのが良い	354 (73.9)	117 (72.2)	
子どもの気持を押さえつける叱り方をすると、大人の顔色をうかがうようになり主体性が育たない	351 (73.4)	112 (69.6)	
子どもは母親の注意を自分に引きつけようとしてまとわりついたり、していることの邪魔をすることがある	349 (73.2)	108 (67.1)	
子どもは言葉で表現するのに時間がかかることがあるがよく聞いてわかってあげることで信頼が育つ	341 (71.3)	133 (82.1)	
幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると、子どもの心は傷ついていることがある	252 (52.7)	71 (43.8)	
全調査対象数	504 (100.0)	162 (100.0)	

目については、現在の妊婦に対する指導内容や強調の度合いも指導者によって異なり、抱き癖をつけないようにしたほうが良い、あるいは時間を決めて授乳したほうが良いという指導がなされている場合も多いようである。それにもかかわらず学生の方が否定的な考え方が高くなっているのは、現在の妊婦および学生の親世代においては、時間決め授乳や抱き癖をつけない指導が強くなされていた世代であるが、妊婦においては実際の生活経験の中で考えの修正がなされてきているのに対し、学生ではその影響がそのまま残っていることが、一つには考えられる。また、環境的なものへの意識は、直接感じ体験されるものであるのに対し、時間軸的な方向へ意識を向けることには多少なりとも観念的に考えを巡らす必要がある。学生のほうに妊婦よりやや観念的な傾向がみられるのは、立場上自然なことではあるが、実際の子育て場面で観念的な考え方を教条的に当てはめると一人一人の子どもとはずれが生じ、そのずれが育児不安の原因になりやすい。実際の育児においては、目の前の子どもの情緒的な側面について養育者が自身の在り方や行動のモニターとして感じ取っていくことの必要性を理解しているかどうかさらに調査が必要である。

先問における調査と今回の調査では、質問紙の回答の仕方が異なるため直接的な比較はできないが、並べて参照すると表10のようであり、「よく知っている」と「そう思う」を対応させてみた場合、両産院とも妊婦の回答はほぼ同様の傾向と考えられる。

## 総 括

育児に関する初期経験に関する考え方について、妊婦162名、家庭科専修生50名についてそれぞれ平成13年と15年に質問紙調査を行い、以下の点を得た。

- ① 初期経験に関する考え方については、今回挙げた15項目の考え方で、妊婦の方が学生より確信をもった回答をしているが、全体として2項目以外では同じように肯定的な考え方をしている場合が多かった。ただし、「乳児が抱いてほしがったらいつでも抱いてあげればよく、抱き癖を問題とする必要はない」「乳児が欲しがったときに、哺乳・授乳すればよく、時間を決めて与えなければならない必要はない」の2項目については、妊婦と学生で回答が大きく異なり、学生では否定的な考え方をしていた。特に情操に関わる意識傾向群別に各項目をクロス集計、検定したところ、両群とも「乳児が抱いてほしがったらいつでも抱いてあげればよく、抱き癖を問題とする必要はない」については、妊婦と学生とで有意な差があり、この項目についての考え方は、妊婦と学生とで異なっていると考えられる。
- ② 情操に関わる3項目から数量化Ⅲ類とクラスター分析により得られた2グループ、すなわち、現在の環境の広がりへ意識を向ける傾向の群と、昔からの人の生活の積み重ねへ時間軸的な方向へ意識を向ける傾向の群とで比較したところ、15項目中3項目に有意差

が見られ、このうち「青少年の問題行動の根をたどると乳児期の親子関係が築けていない場合が多い」1項目は、妊婦と学生間の差と共通していた。現在の環境的な広がりへ意識を向ける傾向の群では、「散らかしたりするような親にとっては不都合な遊びも、子どもの立場では探索学習である」「幼いころからいやがるおけいこ事を強制すると子どもの心は傷ついていることがある」の子どもの立場に立った考え方の2項目について、時間軸的な方向へ意識を向ける傾向の群よりも、肯定の回答が有意に高かった。ただし両群では妊婦と学生の構成割合が有意に異なっていたので、妊婦と学生それぞれの群別に、情操に関わる意識傾向2群の差について調べたところ有意な差のある項目は得られなかった。

現行の学習指導要領では親子関係の重要性が取り上げられており、育児不安や児童虐待などへの社会的な関心の高まりの中で、育児支援活動の一環として行政的にも親子関係に関する指導が母親を対象に盛んになされるようになってきている。今回の調査結果で妊婦、学生ともに肯定的な回答が高かったのは、そうした社会的な動きをある程度反映しているものと考えられる。特に妊婦と学生との間で、抱き癖に関する考え方が異なっていた理由については、興味関心の強さの反映だけとは考えにくく今後調査が必要である。

## 謝 辞

質問紙にご協力くださいました産院と妊婦の方に厚くお礼申し上げます。また特に各学年とりまとめをしてくださった学生4人の方と協力してくださった家政科専修生諸君にも感謝いたします。

さらに、この調査に用いた質問紙は先間敏子氏によるものであり、併せて謝辞を申し上げます。

## 注

- \* 1 先間の報告において用いた質問紙では、初期経験に関する回答の選択肢は「よく知っている」「聞いたことがある程度」「知らない」の3択であったが、本報告で用いた質問紙では、産院の要望によりニュアンスの異なる回答を用意したものである。

## 参考文献

- 1) 山崎晃資：『子どもの発達とその障害，世界の子どもは今』，放送大学教材．放送大学教育振興会．東京．(1995)
- 2) 池山和子，先間敏子：鹿児島県高等学校家庭科保育領域における学習活動，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，第11巻，75-81 (2001)
- 3) 池山和子，長石啓子：家庭科保育領域の適時性に関する学生の意識について，鹿児島大学教育学部紀要(人文社会科学編)，第48巻，59-72．(1997)

- 4) 先間敏子：家庭における子育てを中心とした養育能力の向上，第Ⅱ章妊産婦の育児に関する知識と人格特性，平成13年度鹿児島大学教育学研究科修士論文，24-81，鹿児島大学教育学部。（2001）
- 5) 伊藤芳朗：「少年A」の告白，小学館。（1999）
- 6) 加藤尚武：子育ての倫理学，少年犯罪の深層から考える．丸善株式会社。（2000）
- 7) 西山明編：少年事件，暴力の深層．ちくま書房。（2003）
- 8) K. H. リード：幼稚園，人間関係と学習の場．フレーベル館。（2000）
- 9) 松居 和：子育てのゆくえ，子育てをしないアメリカが予見する日本の未来，エイデル研究所。（1993）